The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	慈円「日吉百首」の成立と性格
Author(s)	山本, 一
Citation	語文. 1983, 41, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

慈円「日吉百首」の成立と性格

山本一

一

『千載和歌集』は、文治四年（一一八八）四月にいちおうの完成を見た後、改訂を経て同八月頃までに最終的に奏覧されたとされているが、[1] この勅撰集に慈円の歌は九首入集している。その九首と『拾玉集』所収歌との関係を見渡すと、「拾玉集」巻一の「述懐百首」「堀河題百首」から各一首（旧国歌大観千載集の一二七二・二六二）、同じく巻一の「日吉百首」から四首（同二〇九・五三二・一〇一八・一一三四）が採られている。他に『拾玉集』に収めないものが二首（三一八・一二二二）、『拾玉集』巻四に見い出せるものの詠作事情が全く判らないものが一首（一〇一七）有る。この状況について注意されるのが、「日吉百首」からの四首という数である。入集歌のうち半数近くがこの百首によって占められていることになる。

『拾玉集』所収の百首歌のうち『千載集』成立以前に詠まれたことの確実なのは、右に掲げた「述懐百首」「堀河題百首」「日吉百首」のほか、文治三年十一月二十一日の日付を持つ「結題百首」、同十一月晦日の「厭離百首」の計五種である。これらは全て巻一に収められているが、巻一巻頭の「初学百首」や、「日吉百首」の直前の位置に置かれている「取集百首」も、巻一の百首歌の配列が大略成立年代順になっていることから見て、『千載集』以前の作と見なされる。[2] 以上の七種の百首歌の全てが俊成の撰歌資料になったかどうかは疑問であるし、勅撰集の選歌は作者の家柄への配慮などの作品評価以外の要因が絡んでくるけれども、概してこの頃までの慈円の作品の中では、「日吉百首」が俊成の高い評価を得ているのである。さらに言えば、文治三年以前の百首歌の中に在って「日吉百首」は、私的述懐歌や習作歌の域を多少とも超える性格を持っていたのではないかと考えられる。

この点を考えるためのもうひとつの目安として、建久末年頃成立の『慈鎮和尚自歌合』（以下『自歌合』と称する）への撰入状況を見ると「日吉百首」の九首撰入に対して、「述懐百首」「堀河題百首」は各二首、「結題百首」は一首、「厭離百首」は三首であり、やはり文治三年以前の百首歌の中では「日吉百首」が群を抜いている（ちなみに、文治四年の「御裳濯百首」「早卒露胆百首」はそれぞれ十一首と九首、建久元年の「花月百首」は十七首、最も撰入数が多いのは建久末年頃の「四季雑各二十首百首」で三十首である。）。『自歌合』の撰歌にあたったのは、承久二年（一二二〇）に書き加えら

れた跋文によれば良経であった。『千載集』に採られた四首は全て『自歌合』にも入っており、俊成の評価が良経に影響したことは当然考えられるが、それにしても慈円の作品によく親しんでいた良経が、文治三年以前のものの中で「日吉百首」に高い評価を与えていることは無視できない。

以上のような点から、「日吉百首」について、これを「述懐百首」など初期の作品と一括して考えるよりも、文治期後半の活発な作歌期への転換点に位置づけ、その成立時期も文治三年に近い方へ引き下げて考えるべきではないかという仮説的な見通しが生まれる。以下では、この見通しを検証しつつ、「日吉百首」の成立と性格について知り得る事柄を整理してみたい。

二

「日吉百首」の成立事情についてまず問題になるのは、名称が示唆する日吉社との関係である。この百首の末尾には跋文の類は無く、百首の外の一首、

うたかたのはかなくむすふ山河を神の心にまかせつるかな

が添えられている。「うたかたのはかなくむすぶ」がこの百首歌の詠作を指し、「神の心にまかせつる」は百首を神に捧げる意思を表わすことは明らかであろう。とすればこの歌は、「日吉百首」が日吉社に奉納されたことを示すのであろうか。

しかしこの点は簡単には言えない。『自歌合』大比叡七番左に、「日吉百首」から採られた

照る月の光とともになかれ来て音さへすめる山河の水

が入っているが、「自歌合」の詞書に「大宮の橋殿にて月を見て」と有り、この歌が日吉社大宮での当座詠であったことを示している。「日吉百首」の全部が日吉社の社前で詠作されたとまでは言えないにしても、日吉社で詠まれた作が含まれているのである。一方で、詞書の中にこの歌が奉納百首のうちの一首であるとは記していない点が、『自歌合』そのものが日吉社と縁が深いだけにかえって気になる。また、建暦三年（一二一三）春、慈円が日吉社に奉納した百首歌の跋には、「いまだひえに百首などよみて奉る事のなかりければにや」とあって、これ以前に別の百首を奉納したことはないとするようである。してみると「日吉百首」は、慈円の内面的意識においては日吉の神に捧げられたものであっても、実際の形式においては、たとえば「清書等納神殿者也」（『自歌合』承久三年跋に、建保・承久期の奉納百首について述べた言葉）といった正式の奉納の形をとらなかったものと見るべきではなかろうか。

成立事情についてはいまのところ右の程度までしか明らかにし得ないが、成立年時についてはどうか。『拾玉集』の配列から、「述懐百首」（治承二年頃）以降[3]、『千載集』成立以前とまで押え得るが、それ以上に狭められないであろうか。

筑土鈴寛著『慈円・国家と歴史及文学』（昭和17年、三省堂）の詳細な「年代記」には、元暦元年（一一八四）の項の終りに「この年日吉百首を詠じた。」と記されているが、根拠は示されていない。同書付載の年譜の同じ年の項には「日吉百首はこの年の作か」と推測の形で掲げられている。俊成に勅撰集撰進の院宣の下ったのは前年寿永二年であり、また元暦二年十二月には慈円の歌合が俊成の許に送られている（『玉葉』十二月二十八日条）。これらの事実と「日吉百首」の『千載集』入集とを考え併わせての推定であったかもしれ

ないが、ただちには従い難い。

むしろ成立年時に関して注意すべきは、「日吉百首」の歌題構成が、『拾玉集』でこの直後に置かれている「御裳濯百首」の歌題構成と全く同一であるという点であろう。青蓮院本『拾玉集』目録も、「御裳濯百首」の項に「題同日吉」と注記してこの事実を指摘している。すなわち、春二十首・夏十首・秋二十首・恋十首・述懐五首・無常五首・雑二十首の構成である。

「御裳濯百首」は、跋が示すように西行の勧進に応じて文治四年秋頃に詠まれているが、この年時は、他の歌人たちが西行の勧進に応じた時点から大幅に遅れている。[4] ふつう「二見浦百首」と呼ばれる西行勧進太神宮奉納百首を定家が詠んだのは、『拾遺愚草』の注記によれば文治二年である。また『千載集』所収の家隆と寂蓮の歌の中に、西行勧進百首の作であると詞書するものが有り、このふたりも遅くとも文治三年中には詠作していたことが判る。したがって勧進そのものは文治二年頃に行なわれたと見られる。この折の百首歌で完全な形で伝わるのは、『拾遺愚草』所収の定家のものと『拾玉集』所収の慈円のものだけであるが、定家の百首は、雑二十首の内をいくつかの歌題に分けているものの全体の構成は慈円のものと同一である。つまり、春・秋・雑各二十首、冬・夏・恋各十首、述懐・無常各五首の構成は、文治二年の時点で西行が提示したものである。

西行勧進百首と慈円の「日吉百首」のいずれかが相手の題構成を踏襲したとすれば、そのことが「日吉百首」の成立年時に関わってくることは言うまでもない。この題構成は、たとえば結題百題といった凝ったものではないが、雑歌と別に述懐と無常を立て、その分恋の歌数を減らしている所に特徴が有り、慈円と西行が偶然に同じものを作ったとはやはり考えにくい。また、西行自身にとって宗教的行為としても大きな意味を持っていたと思われる太神宮奉納百首に際して、他人がすでに他の社と関わり深い場で詠じた題構成を再利用したという可能性も高いとはいえない。慈円が西行勧進百首の影響下に「日吉百首」を詠んだとするのが穏当であろう。そう考えるならば、「日吉百首」の成立時期は、西行の百首勧進以降、『千載集』以前、すなわち文治二年（一一八六）から文治三年という範囲にほぼ限定し得ることになる。この年時は、前節終りに述べた仮説と矛盾しない。

とはいえ、いまのところ「日吉百首」「御裳濯百首」の二度の百首と西行勧進との具体的関連が明瞭に想定できるわけではない。そこで次には、文治二・三年の慈円の動向との関連から、右の推測の妥当性についてさらに考えてみたい。

三

西行は文治二年の秋、鎌倉を経て奥州の旅に出るので、都の歌人たちに奉納百首を勧めたのは文治二年の前半のことと見られている。[5] 『玉葉』によれば、慈円はこの年の一月二十三日に下山して白川の房に入り、その後ここに住していたが、四月九日の条に「法印所労大事之由、仍遣人尋子細」と在って、慈円が病気であったことが知られる。五月二十日、六月一日の記事でも回復しておらず、「雖不及忽大事、病極重云々」（六月一日条）という状態で、ただちに生命の危険はないまでもかなりの重病であった。『自歌合』小比叡十三番左、「病にわづらひける比」の詞書の有る、

たのみこしわか古寺の苔の下にいつしか朽ちん名こそおしけれは、この頃の作かと推測される。

七月六日になって慈円が兼実を訪問しており、三か月にわたった病がようやく癒えたことが知られるが、この前後に源義行（義経）が比叡山の「悪僧」にかくまわれたという風聞が流れ、慈円はこの件についての情報を兼実に報告している（『玉葉』七月三十日、閏七月二日、同九日、同十二日の各条）。ついで八月十五日、慈円は平等院執印となり、また兼実の長男良通の内大臣昇進にともなう不動法の修法（十月二十一日より十一月二日）に従うなど、大病後にもかかわらず多忙であった。

慈円と西行との交渉を直接に示す資料は、文治五年のものと推定される『拾玉集』巻四所収の贈答歌[6]と、『自歌合』所収の年時不明の贈答歌のみであり、それらからかなりの親密さが窺い得るものの、いつごろから二人の交渉が始っていたかは明確にできない。ただ文治二年にすでに親交が有ったとして特に不自然な点はなく、太神宮奉納百首の勧進も定家・家隆らより遅れることはなかったと推測される。しかしこの時の慈円は、病臥中かまたは病後の体で義経問題に兼実とともに対処していたのであり、百首歌の詠作はかなり難しい状態にあった。慈円の詠作が他の作者より遅れたひとつの原因は、この年の彼の状況に在ったと見られよう。

ところがすでに見たように、翌三年になっても太神宮奉納百首は詠作されない。

三年二月二十六日の『玉葉』には「山法師被来、限百日参籠日吉社、仍今日被帰山也」と有るが、「山法師」は「山法印」（慈円）の誤写と見なされ[7]、ここから彼が日吉社への百日参籠を行なっていたことが知られるのである。この日から参籠が始まったとも読めるが、四月二十三日条に「今日、法印出自御社被来」と在り、この日に参籠が終結しているので、期間百日として逆算すれば開始は一月上旬となる。おそらく二月十六日の記事は、やむを得ぬ用件で兼実を訪うたが、参籠を中断しないようその日のうちに帰山したという意であろう。『玉葉』や『門葉記』門主行状[8]によれば、参籠中の三月三十日から、日吉社大宮の彼岸所で後白河法皇のため薬師法を修している。

同年七月三十五日、兼実の男子のひとりが慈円のもとに預けられ、十一月二十七日に出家、同二十九日登山受戒する。また八月二十一日、兼実は氏長者として平等院に詣で、慈円は長吏として準備にあたる。こうした形で、九条家を支える兼実・慈円の協力体制が強化されていくが、その中で十一月二十一日「結題百首」、同三十日「厭離百首」が相ついで詠まれる。ふたつの百首は性格も異なり、それぞれに問題を含むが、ここではこの時期の慈円の作歌意欲の高まりに注目したい。この意欲は、翌文治四年にも引き続いて発展していく性質のものだったと思われるが、二月十九日の良通の急死が九条家に大きな打撃を与え、慈円の作歌活動もここで一時停止する。四年秋になって作歌が再開され、ようやく西行の勧めに応じた「御裳濯百首」が詠まれるとともに、十二月には定家にあてた「早率露胆百首」も成るのである。

このように概観すると、文治二年の事情と四年春の変事とを考慮に入れても、二年に行なわれた西行の勧進と四年秋の詠作とのずれの期間のうちで、なお二年後半から三年前半にかけての時期に空白が有るという印象を受ける。憶測ではあるが、この時期に、「御裳

濯百首」のいわば準備段階として「日吉百首」が詠まれたと考えることはできないであろうか。しかもこの時期に属する文治三年の春、前述のように慈円は日吉社に参籠しており、「日吉百首」中の「照る月の」の一首が詠まれた日吉社大宮に居たという記録も有るのである。

慈円が西行の勧進にただちに応じなかった理由には、病気等の支障の他に、山門の僧として、日吉社をさしおいて太神宮に百首歌を奉納することへのためらいが有ったであろう。文治五年に日吉社奉納勧進百首を企画したり、[9]建久末年に自歌合を同社に奉納したりしたことに見られる、和歌活動と日吉社とを結びつける姿勢に照らしても、慈円のこのようなためらいは容易に想定できる。しかし文治年の後半、定家・寂蓮・家隆らが次つぎに太神宮奉納百首を詠作し二ていく状況には、やはり慈円も作歌意欲を刺激されずにはいられなかったであろう。その意欲が、文治三年春の日吉社参籠の折、西行勧進の題を用いての百首歌詠作となって表われ出たのではないか。この試みによって歌作への自信を深め、また百首を心情的に日吉社に捧げたことでためらいからもいちおう解放されて、慈円はようやく太神宮奉納百首の詠作に向ったのであろう。その完成が翌年秋にまで遅れたのは、良通の急死の影響として理解し得る。

さて次に問題となるのは、右のような想定が「日吉百首」の作品内容とどの程度まで照応するかである。表現の性格については次項以下に触れることとし、ここでは百首中の時代状況に関わるような内容の歌について見ておく。たとえば、

かくはかりうき世にたけきもののふのなくさむ程のことのはもかな（四八一）[10]

は、『古今集』仮名序の「たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり」に拠りつつ、武士勢力に動かされていく時代状況への不安を詠んでいるが、これなどは一見、源平争乱期の作とも見られ得る。しかし、争乱収束後の文治元年十二月十九日の地震（『方丈記』によって知られる前年七月の大地震の余震のひとつ）に際して、兼実はこれが「武士諸国押領之徴」にほかならないと『玉葉』に記している。あるいは文治三年三月四日の院宣に応じた左大臣経宗の意見書は、「武士濫行事、委注申之」というもので、兼実はこれについて、「萬人憚而不申之、元老之臣、猶可謂直者歟」と感じ入っている（『玉葉』四月二十四日）。都の貴族たちにとって、「この世にたけきもののふ」の時代は、争乱収束後におとずれた鎌倉政権の確立によって、より強く印象づけられていたのである。

右の歌の直前、雑部の第一首にあたる

たちそめし八雲の色やいかならむ心にしめぬ人のなき哉（雑・四八〇）

も同じく「仮名序」に拠るが、ここにはむしろ和歌のあまねき力についての楽天的な見方が表出されている。西行勧進百首に関わるまでは限定できないとしても、争乱収束後、文治期における和歌復興の気運と対応するものを感じさせる。

百首の最後、

おほけなくうき世のたみにおほふかなわかたつ杣にすみそめの袖（雑・四九九）

に表明された「憂き世の民」への想いも、兼実との協力体制を固めて王法・仏法協調の政治を目指していた文治二年以降の慈円に、おそらくは想応しいであろう。

右の三首はもちろんいずれも決定的に「日吉百首」の成立時期を示すものではない。しかし、西行の奉納百首勧進より後に詠まれた作としても矛盾は生じないと言えよう。

四

次に、成立事情・成立時期の問題と関連して、「日吉百首」の表現の性格と、そこから窺われる慈円の作歌に対する姿勢とについて触れておきたい。

「日吉百首」の各歌について典拠歌・影響歌を調査していくと、慈円としてはかなり意欲的な古歌・先行歌の摂取のあとが認められる。[11] たとえば三代集については、

ゆふまくれきしたつさはにゑくつめは春のあはれに袖そぬれぬる（春・四〇六）

君かため山田のさはにゑくつむとぬれにし袖は今もかはかす（後撰・春上・三七・読み人しらず）

山のははあまの川せのしまなれや月のみふねのこきかくれぬる（秋・四四〇）

そらの海に雲の浪たち月の舟星の林にこきかくる見ゆ（拾遺・雑上・四八八・人まろ）

のように、三代集歌の表現・用語を採り入れたものや、

花の色をこむともなにかうらみまし風をへたつる霞なりせは（春・四一四）

花の色は霞にこめてみせすともかをたにぬすめ春の山かせ（古今・春下・九一・良岑宗貞）

さらぬたに心ほそきをささかにの軒にいとひくゆふ暮の空（雑・四九〇）

たえはつる物とは見つゝさゝかにのいとをたのめる心ほそさよ（後撰・恋一・五七〇・読人しらず）

山里は春こそ人もまたれけれ梅のたちえにやとをまかせて（春・四〇八）

わかやとの梅のたちえや見えつらん思ひの外に君かきませる（拾遺・春・一五・平兼盛）

のように、古歌の内容を前提として構想が立てられているものが有る。『後拾遺集』以下の勅撰集についても、[12] 百首巻頭の、

あつまより日をかそへてや春はこしけさしもかすむをとは山哉（春・四〇〇）

が、『後拾遺集』春上の、

あつまちはなこそのせきのあるものをいかてか春のこえてきつらん（後拾遺・春上・三・源師賢）

あふさかの関をや春も越つらん音羽の山のけさはかすめる（後拾遺・春上・四・源俊綱）

から着想を得ており、夏部第一首の、

さくら色の衣をたたはぬきかへし山郭公なきてとかめよ（春・四二〇）

が、『後拾遺』夏の巻頭歌、

さくらいろにそめし衣をぬきかへて山ほととぎす今日よりそ待（後拾遺・夏・一六五・和泉式部）

を踏まえるなど、かなり顕著な摂取が認められるのである。[13]

注意されるのは、藤原清輔が第七番目の勅撰集となることを期して編んだとされる『読詞花集』[14]について、

ゆふされはそともにたてるならの木のうれふく風も空やすすしき（夏・四三八）
我やとのそともにたてるならのはのしけみにすゝむ夏はきにけり（続詞花・夏・恵慶）
ゆふまくれなにはわたりを行雁やあしてのうへにかける玉つさ（秋・四三四）
ゆふされになにはわたりをみわたせはたゝうす墨のあしてなりけり（続詞花・旅・行尊）

の二例の摂取例を認め得ることである。[15]『堀河院百首』『久安百首』『月詣集』からの摂取例も見い出せるが、それらのほかに西行・俊成・俊恵[16]らの先輩歌人の作からの摂取の例として、[17]

ゆふなきにみやこはるかになかむれは心のはてもなきしほちかな（雑・四八八）
なかめやる心のはてそなかりけるあかしのをきにすめる月影（林葉集・四八五）
わかこゝろつきはてねとやいほりさすをはつせ山のいりあひのそら（雑・四九一）
心なきこゝろもなをそつきはつるつきさへすめるすみよしのはま（長秋詠草・二四八、住吉社歌合）
霞しくまつらのおきにこきいててもろこしまての春を見る哉（春・四〇三）
けふといへはもろこしまてもゆくはるをみやこにのみと思けるかな（長秋詠草・四八三、治承二年兼実家百首・立春）
神かきやねかひをみつのはま風に心すすしきしてのをと哉（雑・四九八）
さゝ波や願をみつの浜にしも跡をたれます七のおほむ神（治承二年兼実家百首・神祇・俊恵）[18]
秋とのみなかめし夜はの月影は心の空にすみける物を（雑・四九四）
やみはれて心のそらにすむ月はにしの山へやちかくなるらん（山家集・八七六）
世の中を思もいれぬ人にさへ心をつくるあきのやま里（秋・四八八）
をしなへて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋のはつ風（西行上人集・一六七）

をあげることができる。兼実家百首の歌を学んだ二首のうち「神かきや」は『千載集』に、「霞しく」は『自歌合』に入集しており、先輩歌人の作の摂取が成功した例と言えようか。

以上見てきた所から、「日吉百首」を詠んだ頃の慈円が、勅撰集をはじめとして『兼実家百首』や私家集または個人の詠草にいたるかなり多様な歌書類を、相当熟心に参看したらしいことが窺われるのである。九条家と和歌との縁の深さは、慈円がこれらの歌書を容易に目にし得る条件を作っていたに違いない。しかし、「日吉百首」に先立つ「堀河題百首」においても勅撰集や『月詣集』『堀河院百首』の摂取は指摘し得るものの、全体として見る時これほど目立つものではない。

おそらくこの現象は、「日吉百首」の時期の慈円が、古歌や先輩歌人の歌を学び、他の歌人たちと比肩し得る歌を詠もうとする意欲に燃えていたことを、示しているであろう。歌人としての自己形成への意欲と言ってもよい。すくなくとも、これは単なる私的な感情

吐露といった動機で詠まれた百首ではないとは言えそうである。前項で推測したように、西行の勧進に他の歌人たちが応じていく状況に刺激されての詠作であったとすれば、従来の作品を積極的に摂取しようとする慈円の態度も、自然なこととして理解されるのではないであろうか。

五

最後に、文治二・三年の頃における和歌界の新しい動きの反映を「日吉百首」に認め得るかどうかについて、とくに定家との関連を中心に見ておきたい。この点で注意されるのは、感覚的事象（音・色・香など）の把握に特色を示す歌がいくつか含まれていることである。たとえば、

ほととぎすきなかぬおりも橘の梢にこゑはある心ちして（夏・四二二）

は、『後拾遺集』夏部の大弐三位の歌「またぬよも待夜もききつ時鳥花橘の匂ふあたりは」を意識していると思われるが、不在の時鳥の声を橘の香から幻想するという着想に特色が有る。そこには俊成の、

過ぎぬるか夜はのねざめの郭公こゑは枕にあるここちして（治承三年兼実家歌合）

の影響も有ったかもしれないが、それ以上に定家の、

あやめ草かほるのきはの夕風にきく心地するほとゝきす哉（拾遺愚草・一二三・二見浦百首・文治二年）[19]

との趣向の類似が注目される。久保田淳氏は、定家のこの歌を「眼前の景には無いもの、乃至は眼前の景とは異なったものを心象の世界に描いて、それに陶酔しようとする傾向」[20]を示す作のひとつに数えられた。この評は或る程度まで慈円歌にもあてはまるし、すくなくとも「嗅覚から聴覚が連想されるという、一種の錯角の世界」（久保田氏）への着眼という点は、両首に共通している。歌そのものからは先後関係を確定し難いが、本稿の立場からは、「二見浦百首」（西行勧進百首）の定家歌が慈円の着想の契機となった可能性を考えたい所である。

ゆふされはそともにたてるならの木のうれふく風も空やすすしき（春・四二八）

は、前述のように『続詞花集』の「我やとのそともにたてるならのはのしけみにすゝむ夏はきにけり」を摂取しているが、高木の梢に吹く風の涼しさを想像によって感覚する所に新しさを見せる。定家には、

つゝきたつせみのもろ声はるかにて梢も見えぬならのしたかけ（拾遺愚草・一二九・二見浦百首・文治二年）

の作が有る。赤羽淑氏は、この定家歌に「可視的なものを否定することによって想像力を自由に働かせ、広がりと深さをもつイメージの世界を創り出す」方法を認められている。[21]慈円の歌にはそうした屈折した表現法は認められないが、感覚を想像力と結びつけることによって「楢の梢」という素材を作品化している点は同じであり、影響関係を考え得る。

小萩はらうへには露の玉ちりてしたにはむしの声みたるなり（秋・四三二）

は、『金葉集』の行尊の作「小萩原匂ふさかりは白露の色々にこそみえ渡りけれ」などが発想の源に在ったかもしれないが、露の光（視

覚）と虫の声（聴覚）とを上下の二層として組み合わせて、新しい興趣を求めている。定家は似た題材で、

たつぬれは花のつゆのみこほれつゝ野風にたくふ松虫の声（拾遺愚草・二三〇・皇后宮大輔百首・文治三年春）

を詠んでいるが、むしろ赤羽淑氏が「ふたつの空間から構成されている」あるいは「視点が上下に分裂する」歌として注目された、[22]

風かほるをちの山地の梅花いろにみするは谷のした水（拾遺愚草・一〇七・二見浦百首・文治二年）

五月雨のくものあなたをゆく月の哀のこせとかほる橘（拾遺愚草・一二五・二見浦百首）

などが、二層からなる景物把握という点で慈円歌につながるものを持っている。ただ慈円歌は、定家の歌よりずっと単純明快で、「うへ・した」の二層構造を前面に出しているのではあるが。

『自歌合』撰入歌の、

てる月の光とともになかれきてをとさへすめる山川のみつ（秋・四三九）

では、流れ下る谷川の水音と月光のきらめき、視覚と聴覚とが交響する情景を新鮮に捉えており、俊成の判詞も「ひかりとともになかれきてをとさへすめると侍、山川のけしき、猶かぎりなくや侍らん」と評価している。定家には、

松風のひゝきも色もひとつにてみとりにおつるたにかはの水（拾遺愚草・三三四・閑居百首・文治三年冬）

が有る。より精緻な景物の響き合いを狙っているが、発想の型や句法は慈円歌とほぼ同一である。この場合は、定家歌の詠作時期から見て、慈円から定家へという方向の影響を考えるべきであろう。

文治期の定家の歌の特色については、赤羽淑氏、久保田淳氏らの先学により詳しく論じられている。ただ、慈円と定家との関係については、「日吉百首」が、「二見浦百首」以下の文治期の定家の百首歌に先行するという前提の下に考察されてきたようである。しかし、文治二、三年の間に「日吉百首」と定家の「二見浦百首」「皇后宮大輔百首」「閑居百首」が相前後して成立し、これらの百首に見られる二人の歌人の共通性は、相互影響あるいは同時代性の現われであったと捉えることもできる。その方が、「日吉百首」が和歌界の状況から何か孤立して成立したと見るより自然でもあろう。もちろんこの点は、文治期の新風和歌と慈円との具体的な関わりをさらに究明するという課題に結びついてくる。

本稿は仮説と状況証拠とを列挙してきたにすぎないが、「日吉百首」の成立時期に関するひとつの問題提起とはなり得たであろう。文治期の慈円の作品の展開を見わたす中で、この想定をさらに吟味することを、今後の課題としたい。

注

(1) 谷山茂氏『千載和歌集の研究』（昭和36年、私家版。谷山茂著作集第三巻に収録。）、久保田淳氏・松野陽一氏校注『千載和歌集』（昭和44年9月、笠間書院）解説。

(2) 久保田淳氏『新古今歌人の研究』（昭和48年3月、東京大学出版会）五四三頁。

(3) 「述懐百首」を生んだ無動寺千日入堂の年時については、鈴木正道氏「慈円の『述懐』歌とその背景」（山形県立米沢女子短期大学紀要・第十四号、昭和54年12月）の考証が詳しい。

(4) 久保田氏、前掲『新古今歌人の研究』五七二頁。

(5) 久保田氏、前掲書、五五八・九頁。

(6) 松野陽一氏『藤原俊成の研究』(昭和48年3月、笠間書院)七二九頁。
(7) 多賀宗隼氏『玉葉索引』(昭和49年3月、吉川弘文館)では慈円の項に採ってある。
(8) 『大日本史料・第五編の二』所収。
(9) 拙稿「文治五年の慈円の和歌活動」(大阪大学文学会「待兼山論叢」、昭和57年12月)
(10) 慈円歌の引用と歌番号は多賀宗隼氏編『校本拾玉集』(昭和46年3月、吉川弘文館)による。
(11) 三代集の引用は、西沢経一氏・滝沢貞夫氏編『古今集校本』所収貞応二年本、大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』所収天福本、片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究』所収天福本による。
(12) 『後拾遺集』本文は、増田繁夫氏ほか編『後拾遺和歌集総索引』による。
(13) 『後拾遺集』『金葉集(二奏本)』『詞花集』からの摂取例をあげておく。

心なき人にみせはや霞しくたかつのみやの春のあけほの(春・四〇四)
心あらん人に見せはや津の国のなにはわたりの春の気色を(後拾遺・春上・四三・能因)
かへるかり雲井はるかになりぬれと霞にのこるつるのもろ声(春・四一五)
帰かり雲井はるかに成ぬなり又こん秋も遠しと思ふに(後拾遺・春上・六八・赤染衛門)
かけうつすやなきのいとをたよりにて波のあやをるたつた河哉(春・四〇九)
風ふけはなみのあやをる池水に糸ひきそふる岸のあを柳(金葉・春・二六・源雅兼)
よしの山もとすむ人にたつぬれはねたくも花のあるしかほなる(春・四一一)
昔見しあるし顔にも梅かえの花たにわれに物かたりせよ(金葉・雑下・六四二・藤原基俊)
神無月しくれは過ぬ竹のはにはけしきをとや霰なるらん(冬・四五四)
たけの葉にあられふるなりさらさらに一人はぬへき心ちこそせね(詞花・恋下・二五三・和泉式部)
夕まくれたたひとりゐてなかむれはあはれすきたる庭のまつかせ(雑・四八九)
ひとりゐてなかむるやとのおきのはに風こそわたれ秋のゆふくれ(詞花・秋・一〇五)

(14) 『続詞花集』は、陽明叢書国書篇第五輯『中古和歌集』所収のものによる。
(15) 例を掲げておく。

さためなくゆきかへるにそしられぬるいつくもおなしかりのやとは(春・四一六)
いかなれはくさのまくらにゆきかへるかりのやとにもとまるこころを(堀河院百首・帰雁・藤原仲実)
おもひねの夢ははかなき物なれと見つるなこりはうれしかりけり(雑・四六四)
ね覚つゝこはいかにして嬉しきそ夢ははかなき物としるしる(堀河院百首・夢・源顕仲)
時雨をもこのはとのみやおもはまし槙のいた屋のまはらならすは(冬・四五一)
まはらなる槙の板やに音はしてもらぬ時雨は木の葉なりけり(久安百首・俊成)
やともなし今朝わひしらにこえきつるあらちの山の雪のゆふ暮(冬・四五〇)
跡たえてあらちの山の雪こえにそりのつなてを引そ煩ふ(久安百首・親隆)
世の中に草のいほりはおほかれと露のうき身そをき所なき(述懐・四七〇)
たれもみな露の身そかしと思ふにも心とまりし草の庵かな(月詣集九・実国)

ころもうつきぬたのをとの身にしみてあはれもよはもふかくなる哉
（秋・四四五）
降雪も哀もともにつもる哉冬深くなるみ山辺のさと（月詣集十・実運）

（16）私家集の引用は『私家集大成』による。
（17）底本、第一句「ゆふおきに」とし、「お」の左傍に「な歟」と注記。
（18）『新続古今和歌集』による。
（19）定家歌の引用は、赤羽淑氏『藤原定家全歌集』による。
（20）久保田氏、前掲『新古今歌人の研究』五六三頁。
（21）赤羽氏「文治期における定家の作風」（ノートルダム清心女子大学国文科紀要・第五号、昭和47年3月）
（22）赤羽氏、前掲論文。